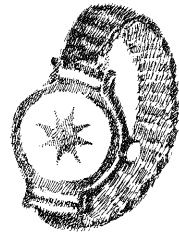


介護の本質を考える

三好春樹『元気がでる介護術』

岩波アクティブ新書 二〇〇二年

小林 瑠以



この本では、介護する側とされる側が織りなす十一の小さなドラマに沿って、老人介護が語られている。

著者の三好春樹（一九五〇〜）は理学療法士。

二十四歳で特別養護老人ホームの介護の仕事に就いた後、三十一歳でリハビリテーション大学校を卒業、理学療法士となった。誰もが大病院に就職

したがるのだが、三好はもとの職場である特養ホームに心ひかれるものがあって、自ら希望してそこに戻ってしまった。

理学療法士というのは、運動障害を持った人に筋力の増強のための訓練、関節をもっと動かせるようにするための訓練などをして、その回復・改善をはかる専門職であるが、三好はどうしても理

学療法士のわくにおさまることができない。

例えば、在宅介護で片マヒの母親にピー玉つまみ、編み物等の訓練を熱心にやらせている娘から相談を受ければ、温泉への一泊家族旅行の実現を企てる。また、施設においては、「遊びリテーション」と名付けている、「風船バレーボール」「ゲートボーリング」(ゲートボールの玉で空き缶を倒す)等のリクリエーションを推進する。

三好の考えによれば、「多くの人は老人が寝たきりになるのは身体の障害が原因だと考えている」が、そうではない。例えば、よくある脳血管障害で片マヒの人が寝たきりになるケースは、片マヒなら使える方の手足で起きたり立ったりできるはずで、それが寝たきりになるのは「相互的で多様な人間関係が失われ、治療される、介護されるという一方的な関係によって受け身にされ、主体が崩壊」するからである。三好は、だから「老

人へのアプローチとして必要なことは、身体へのリハビリなどではなくて、関係づくりのケアである」と言う。

三好が特養ホームで介護の仕事をするようになったのは、老人介護に興味があったからではなく、高校中退のため「就職先がなく、人手不足で困っていた特養ホームにしか入れなかった」からである。

私には、この本を読んでいて、三好の到達した老人観のルーツには学園紛争体験があるのではないか、ということが思われた。

三好が高校生だった時期は、私が大学紛争をやっていた時期でもある。生徒に一定の知識・技能を習得させ世に送り出す学校教育システムは、生きている生徒ひとりひとりの主体を育てないという思いが私にはあり、学校教育そのものの意味を問うことにより、自分の主体を取り戻そうとし

たのが、私にとっての大学紛争だった。

三好にも、似た思いがあったのではないだろうか。

三好が自分の主体の危機に対して敏感だったからこそ、片マヒで寝たきりになってしまいう老人の「主体の崩壊」にも気付いたのではないだろうか。

三好は「介護は介護力ではない」「介護の本質は介護関係だ」とも言っている。介護保険が施行されることになった時、コムスンやニチイ学館といった大手介護業者が介護市場を席卷するだろうというのが大方の予想だったにもかかわらず、その予想は見事にはずれた。これは、三好によれば、大手業者は「促成栽培された二級ヘルパーを集めて介護力を提供すれば、困り果てている老人や家族はすぐにフリーダイヤルに電話してくると思った」が、「老人や家族の求めているものは、単なる介護力ではなく」、「変なヘルパーに家の中

に入られるくらいなら、たいへんでも一人でみたほうがいい、と考えている」からだ、と言う。

私は、自分自身の介護体験から、三好の「介護は介護力ではない」「介護の本質は介護関係である」という言葉に共感する。

私にはパーキンソン病で痴呆の母がいる。弟一家と一緒に住んでいるので、私は時々訪れ母とふたりで昼食を食べるぐらいのかかわり方しかしてこなかったが、母の痴呆が重くなり、弟夫婦の負担も大変になったので、去年の夏からは、私も介護に週二日通うようになった。

母は自分からしゃべることは、ほとんどできない。表情も乏しいし、起きていてもすぐ眠くなるから、母とのコミュニケーションは困難を極める。だからといって、私が介護力だけを行使しようとするのとたんに、うまくいなくなる。薬を飲ませようとしたり口を開かない。トイレに行か

せようとしたら動かない。

母がその気になるのを待つしかない。食後の薬を母が飲むとしなくても、しばらくしてまた勧めてみる。それでもだめならまたしばらくして、それでもだめなら何遍でも。飲む時は飲むのである。驚いたことに、私の姿勢がそんな風になってきたら、だいたいのことがうまくいくようになった。

今年の四月、母は特養ホームに入所した。母に面会に行くようになって、私ははじめて老人介護施設というものにも接する機会を得、母以外の老人たちも見えた。そういう目で私の母へのこれまでのやり方を振り返ってみると、これは、母と私の場合たまたまこれで何とかやれたということではなく、介護者が老人に接する時の基本的な姿勢とも言うべきものであったらしい。

どんなに痴呆が進んでも、言葉で表現できない

だけで、その人の気持ちというものはある。介護者はそれをどこまで受け止められるか、いつも試されているように思う。

痴呆の介護ばかりではない。三好は「私自身も遅まきながらも子育てを体験することになった。その中で実感的にも、老人ケアと子育てに通底するものを感じとり、……」と言っている。言葉の力に頼ることはできず、相手の気持ちを受け止めようという姿勢があつた時に、はじめて道は開けてくるのは、老人介護も子育ても同じかもしれない。

(音楽教室主宰)